
指先から伝わる

朱

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

指先から伝わる

【Zコード】

N6142C

【作者名】

朱

【あらすじ】

同級生で、部活仲間の功が好きなユカリ。ユカリにだけ引っ越しのことを伝える功。中学生の、甘く切ない恋。

あなたの隣はあたしであればいいと、何度も願つたことか。

あなたの一番はあたしであればいいと、何度も想つたことか。

【指先から伝わる】

中学三年の夏、あたしは切ない切ない恋をした。

『告つちやえばいーのこ』

マナミはあたしの唯一の親友だ。一年のときのクラス替えで会つて、すぐ仲良くなつた。喧嘩だつてもちろんしたけど、どつかの誰かがいつたように喧嘩するほど仲が良かつた。マナミには彼氏がいて、紹介してもらつたけど、すぐくかつこよくて、優しくて。でも少し背が小さいかつた。本人もそれが悩みだと言つていた。

『ユカリはさ、積極性がないんだよーあたしいつも思うんだあ

』
『、、、そつかなあ

』
『そだよ、絶対！』

今まで恋愛は何回かしてきた。もう中学三年だし、まだ恋をしてないことはなかつた。それでもマナミが言つように、あたしは積極性がないのかもしない。前好きで付き合つた人には、『一緒にいてもつまんないから』とキッパリ言われて別れた。別にキスとか、恋人らしいことがしたくないんじゃなかつた。ただ、相手がそういうことしか頭にないのかな、と思うと怖くなつて。

そんななか、あたしが好きになつたのは同じ部活の同級生だつた。て言つても、三年はもう引退したんだけど。

かつこいいとは掛け離れていて、どつちかつていうと童顔のかわいい系だ。

そんな功^{コウ}があたしは大好きで、部活では付き合つてるのか?つて聞かれるくらい仲が良かつた。楽しかつた。

それなのに、

『俺、引っ越すから』

突然だつた。

もちろんあたしはそんなことこれっぽっちも知らなくて、訳が解らなくなつてそこから逃げ出した。

ただ、功があたしの前から、日常から消えるなんて、考えたくない

て、 、 、

『ユカリ』

『 、 、 功』

引っ越すから、と告げられたのは一週間前。それからは一言も喧嘩をかわしていない。

『 、 、 何？ そんな顔して』

功は少し下を向いていて、女の子のよつよつ長い睫毛は伏せられていた。

嫌な予感が、した

『 明後日、行くんだ』

ああ、やつぱり

あたしの勘は、当たってほしくなことにだけ当たるんだ。

『……そっか、わかった』

出来る限り、明るい声で。

教室からでていいく功の背中を見つめて。その時、あたしはこの気持ちは開まっておいたと心にきめたんだ。

だって、もし功があたしを好きでいてくれたとしても、遠距離なんて不安過ぎるから。

『おひなこみ、開まつておべの』

『へへ、やつかあ』

マナミは残念そう、それでいて優しい田代をうつした。こんなに、表情だけで心が温かってくれる友達はなかなかない。

功があたしの側から居なくなるまで、あと一日。

明日から、功はあたしを見てくれなくなる。

先生は功が引っ越すまで
クラスの皆さんに言いつもりはないらしい。きっと功が頼んだんだ。
功は、そういう人だから

この日功とは一言も喋らなかつた。目だつて合わせれなかつた。
そして功がいなくなる日

『ユカリ、』

『、、、何?』

学校へ入った所で功に声を掛けられた。やっぱり目を伏せていて。

『あのさ、今日学校終わつたら、見送り来てくれないか?』

少しひかえめに功は言った。

断れるわけ、ないのに。

『当たり前でしょー。』

ぽんつ、とあたしより少しだけ高い位置にある頭に手を乗せて、わしゃわしゃと撫でる。

『うわっ！何すんだよー。』

少し抵抗したけど、やつぱり功は優しくて、あたしの乱暴な撫で方を受け入れてくれた。

さよなら、あたしの恋心。

あんまりどうか、全く授業には集中できなくて。
あつといつ間に見送りの時間の30分前だった。

何着て行こ。

いつそのこと制服で行こつか。

そんなこと考えながらオレンジのロゴ入りキャミ、ショーパンに
着替えて家を出た。

特に何も考えないで歩いて、家から歩いて三分钟左右のバス停が見
えてきた。

あ、功、、、荷物多いな。

本当に元に行つひやうだ、

『ヽヽヽ、ユカリ』

『ヽヽヽ、やせ。お母さん達は?』

『先に行つてる』

『そつか、ヽヽ』

『ヽヽヽ、なあユカリ。楽しかったよな、今まで。部活も、クラスも

ヽヽヽやめて、そんなこと言わないで。過去にしないで。

『すつづー楽しかった!!』

人生で、きつと一番だ！』

突然大きな声で、功は青空をみていった。

『、、、絶対忘れない』

視界が、歪む

『うん、忘れないで』

功と目が合つ。

同時にあたしの目から涙が流れ落ちる。

『何泣いてんだよ』

功は優しく苦笑して、

あたしの頭を撫でながら、手を握ってくれた

指先から功の体温が伝わってくる

『、、、功』

『、 、 、 ん?』

『、 、 、 ザつと好きだった』

閉まつておじいと、決めたの。絶対に言わないと、決めたの。

『、 、 、 うん、 僕も』

『、 、 、 功、 会えるよね、 また』

『当たり前』

『、 、 、 あは、 断言?』

繋いだ手から功の暖かさが注がれる気がして、涙が止まらなかつた。

『あ、 バス、 、 、』

功の言葉と同時に曲がり道のかげからバスが見えた

『じゃあ、行くな

』、『ばいばい、功』

功は何も言わずに荷物を持って、帽子を深く被った。

指がするりと離れる

バスがあたし達の隣に止まって、ドアが音を立てて開いた。

功はあたしの手に何か握らせて、耳元に顔を寄せて、

『好きだ

1番聞きたかった言葉。

あなたのくちから、一度でもいいからと。ずっと求めていた言葉。

『あたしも、 、 、 だいすき』

あたしの声はバスの発進音に強き湧されて、 功の耳に届いたかさえ解らない。

『またね！功！』

バスの一番後の窓から功はあたしに手をふつた。

くしゃり、 とあたしの手の中で小さな紙切れが鳴った。

あたしはその紙切れをみて、涙じやなくて笑顔を漏らした。

『、 、 、 ずっと待つてる』

『高校卒業したら、会いに行くから。
それまで待つててな』

中学三年の夏、あたしは切ない切ない恋をした。

中学三年の夏、あたしはあなたの為に一生分の恋をした。

ありがとうございます、だいすきだよ

指先から伝わる、あなたの温もりが

あたしは向よりも好きでした。

【指先から伝わる】

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6142c/>

指先から伝わる

2010年10月17日23時36分発行